

第2回「泉大津市オリアム随筆賞」

【優秀賞】

セーターとスキヤキ

坂本ユミ子・兵庫県

私が小学一年生か二年生の頃のことですから、もう五十年近くも昔のことです。秋の終わりが冬の始めだったと思います。

母と私は駅前の商店街へ買い物に出かけました。先に行く母の足が洋服店の前で止まりました。母は店先に吊るしてあったセーターをじっと見ていました。どんなセーターだったかは覚えていませんが、白いセーターだったことはなぜか覚えています。

母は長い間そのセーターを見ていましたが、やがて私の手を引き、八百屋さんへ行きました。買い物済ませた帰り、母はまた洋服店の前で立ち止まりました。今度はセーターを手に取って見ていました。

（早く家に帰って、駄菓子屋さんで買ってもらったお菓子を食べたいなあ）

と思いつつ、私は母を待っていました。母はやっと買う決心をし、店員さんにセーターを包んでもらいました。

家に帰って母は包装紙をていねいに開け、セーターを取り出し、正座した膝の上に置いてじっと見つめていました。私はお菓子を食べながら、母の様子をうかがっていました。しばらくして母はセーターを元通り包み直しました。

「ちよつと行って来るから、お留守番していてね」

姉たちは遊びに行ったまま、まだ帰って来ません。一人ぼっちで留守番をするのは嫌でした。

「私も行く！」

母にくつついて行きました。母は再び駅前の商店街へ行き、セーターを買った洋服店に入って行きました。

「あの、申し訳ないのですが、このセーター着てみたら、サイズが合わないのです、お返ししたいのですが・・・」

母は店員さんにそう言つて、セーターを返品しました。

（ウンだ。お母ちゃん、セーター着ていないのに・・・）

母がどうしてウンをついてセーターを返品したのかわかりませんでした。その後、母はお肉屋さんへ行って牛肉を買いました。牛肉なんてめったに買わないので、驚きました。母は笑顔で、

「ユミちゃん、今夜はスキヤキだよ」

なんでスキヤキ？お正月でもないのに。今夜はサバの塩焼きにするって言っていたのに。

当時、わが家ではスキヤキはお正月にしか食べられない特別なご馳走でした。八百屋さんへ行って卵や野菜、シラタキを買って、母と私は家に帰りました。家に帰っていた姉たちは「スキヤキ」と聞いて大喜びしました。

父が交通事故で亡くなった時、母は三十二歳でした。姉は六歳と四歳、私は二歳でした。母は実家にたよらず、再婚もせず、生命保険の外交員で生計を立て、女手一つで私たちを育ててくれました。

家族全員がそろった卓袱台で母はスキヤキを始めました。私たち三姉妹はスキヤキ鍋をじっと見つめていました。母はスキヤキ鍋に牛脂をひき、肉を入れました。肉が焼けたら砂糖としょう油を入れました。シラタキや野菜を入れる前に、母は肉を三姉妹のとり鉢に一切れづつ入れてくれました。

その肉のおいしいこと!!

母は笑顔で三姉妹を見ていました。

口下手で人見知りだった母にとって、保険の外交員は辛い仕事だったでしょう。仕事に追われ、家事に追われ、子育てに追われ、なりふりかまわず働いて働いて、おしゃれする心のゆとりもお金のゆとりも無かったでしょう。

あの時、店先で白いセーターを見た時、母はふっとおしゃれしてみたくなったのでしよう。契約が取れてちよっぴりゆとりがあったのかもしれない。母はさんざん迷った後、思い切ってセーターを買いました。でも、家に帰ってセーターを見ているうちに、自分がおしゃれするより三姉妹にスキヤキを食べさせてやりたいと思いついたのでしよう。

私は大人になってから、その時のことを母に聞いてみました。

「そんなこと、あったかなあ？」

母は忘れていましたが、私はスキヤキを食べるたびに思い出します。母が正座した膝の上に置いた白いセーターをじっと見つめていた姿を。